タイトル：対話と想像
学校名・学年：関西創価高等学校・３年
名前：　茂山　聖菜

（本文）
「じいじ！結果どがんやった？」
私が駆け寄るその先に、顔の半分以上をマスクで占めた祖父が立っている。私の声に気がついたのか、大きく腕を上げると、頭の上で丸を作って私に示した。薄ら見えるその目は、少し微笑んでいるようだった。
今日は祖父の定期検診及び、誕生日である。
七十六歳になった祖父はこれまで、十三回の手術を経験してきた。食道癌、胃癌、肺癌、そして咽頭癌。今日は半年に一回ある定期検診の日で、片道二時間かけて長崎大学病院に付き添いとしてやって来た。どうか癌が見つかりませんように、そう強く願って、説明を受けている祖父母を母と二人で待っていた。祖父へのバースデーカードを書きながら。
結果は、癌は見つからず大丈夫とのことで、また元気に半年を過ごせると安心しているのか、祖父の機嫌はとても良いように思えた。病院の帰りに寄ったスーパーで、ショートケーキを買ってあげた。渡す時、祖父は右手をあげて頭をぺこりと下げて、「ありがとう」と示した。帰り際、大きく手を振って「バイバイ」と示してくれた。
私は祖父の声を聞いたことがない。
二〇〇六年、私が生まれた年に、祖父は咽頭癌で声帯を失った。私が物心ついた時から祖父はユアトーンを使ったり、紙やペンを用いたり、手話や身振り手振りを付けて会話をしている。祖父の趣味は家庭菜園で、庭はたくさんの野菜や花でいっぱいになっている。夏になるとトマトやキュウリ、ピーマンやイチジクが、冬になると大根や白菜が収穫され、いつもおすそ分けしてもらう。料理上手でもある祖父は、両親が仕事の時によくご飯を食べさせてくれた。幼い頃はひらがなやカタカナも教わっていた。大好きな祖父との思い出は一生の宝物である。
そんな祖父は若い頃、海上自衛隊に務めており、水泳の国体選手でもあった。当時の写真を見ると、背中は逆三角形でとても筋肉質な体である。が、今はもう泳げない。喉に空いている穴に水が入ってはいけないらしい。今では体つきは薄く、手足は細くなっている。祖父の家には選手だった頃の賞状や写真がたくさん飾られていて、そのタイムは信じられないくらい速く、とても誇りに思っている。それは、私も水泳の経験者であるからだ。祖父の血を引き継いだのか、私は小学生の時に水泳を始め、高校では水泳部に入った。中学では別のスポーツをしたが、高校でまた水泳を始めた理由。泳ぐことが好きだから、それももちろんあるが、祖父と泳ぎたい、その一心だったのかもしれない。頑張っても願っても、一生叶わない夢であることは分かっているが、孫として一目祖父の泳ぎを見てみたかった、そして教えてもらいたかった、そんな気持ちがずっとあった。だから、泳げなくなった祖父の分まで

泳ぐ。泳ぎ切ってやる。三年間水泳部として頑張ることができたのは、紛れもなく祖父のおかげである。

私はずっと、祖父が障がい者であることを信じられなかった。障がい者手帳によってバスに無料で乗れたり、医療費の助成制度を利用できたりすることから、改めて障がい者なんだなあと実感してしまう。「障がい者」と聞くと、ついつい「普通じゃない人」を想像するのではないだろうか。一目見て、普通か、障がい者か。私はそんな概念は間違っていたと、祖父を通して気づく。

「普通」の人間はこの世にはいない。ベーシックな形を表す者はいないのだ。しかし、なぜ人間は「普通」と思いたがるのか。それは自分にとっての「普通」、言い換えれば、「当たり前」を相手に押し付けようとするからである。誰かにとっての「当たり前」は、ある人にとっては「当たり前」じゃないかもしれない。自分ができることをできない人が現れた時に排除するのか。逆に、相手にできて自分にできないことがあった時、自分は排除されてしまうのか。

結局大事なことは、「対話」と「想像」だと思う。一見、健康な人と思えても、話してみると声が出なかったり、喋るのが上手じゃなかったりするかもしれない。車椅子が必要な人や、介護なしでは生活できない人だっているかもしれない。私はその人がどんな人なのか知るために「対話」し、どんな思いをしているのか「想像」して、共感できる人でありたい。そして誰に対しても、たった一人のかけがえのない「人」として接していくことを大切にしたい。身近にいる大切な人に教えてもらった大切なことを、私は心において生きていきたいと思う。

ある日、祖父の家に行った時、手でものを型どるような身振りと、お礼を言う身振りをしながら私に話しかけてきた。分かろうと努めたがこれは難しい。

じいじ、せめてマスクは外そうか。